

原爆乙女と谷本清牧師

飯塚 修三

いづか眼科 (西宮市)

1955年5月5日早朝、25名の原爆乙女の一行は市役所前に集合した。原爆慰霊碑に花輪を捧げて後、岩国米軍基地にバスで出発した。渡航費の調達に苦勞したカズンズが考えた窮余の一策であった。その当日、アメリカ国防総省よりGHQに輸送を中止せよとの電報が届いた。ハル司令官は「手元にメガネがないので読めない」と言って無事飛行機を出発させた。出発後、彼は「電報は間に合わず、もう出発した。呼び返せば米軍の恥になる」と国防総省に返信した。

原爆乙女達がニューヨーク・マウントサイナイ大学病院で治療するのに尽力したのが、谷本清牧師(関西大学神学部卒)である。谷本清牧師(1909～1986年)の略歴を下記に示す。

1909年、香川県坂出市に誕生。

1926年、18歳で受洗。関西学院大学神学部を卒業後渡米。

1940年、ジョージア州アトランタ、エモリー大学卒業。ハリウッド日本人独立教会牧師。

1941年、戦争勃発により帰国。

1943年、日本メソジスト広島中央教会(後の広島流川教会)に赴任。

1945年8月6日、爆心地から約3kmの知人宅の庭先で被爆。

1950年、ヒロシマ・ピース・センター理事長。

1955年、原爆乙女を伴い渡米。

1986年、永眠。

1987年、第1回谷本清平和賞をノーマン・カズンズが受賞した。

1945年、8月6日8時15分、谷本牧師は爆心地から西約3kmの^{こい}己斐地区の知人の家に居た。流川教会は爆心地より東、約1.1kmであった。牧師は市街中心部より避難してくる人々をかき分け、東に進み流川教会にたどり着いた。幸い家族は全員無事であった。

1946年5月、「ライフ」、「ニューヨーカー」特派員・ジョン・ハーシーが谷本清牧師らの被爆体験者にインタビューした。同年8月31日、彼は「ニューヨーカー」の全紙面を割いてヒロシマの惨状を報告した。それ以後、谷本清牧師はアメリカでの講演に度々招かれていた。

1951年8月、谷本牧師はケロイドで悩む女性を教会に集めて「被爆者自力更生会・シオンの会」を作った。聖書研究を通じて、傷ついた乙女の立ち直りを図る意図であった。

1953年8月、「サタデー・レビュー」誌の主筆ノーマン・カズンズは三度目の来日で、谷本牧師に紹介されて流川教会で初めて原爆乙女に会った。特に妻エレン夫人は深刻な衝撃を受けたようである。帰米したカズンズは、エレン夫人の強い助言もあって原爆乙女をアメリカの病院で治療しようと決心した。

カズンズは彼のホームドクターのウィリアム・ヒッチグ医師に相談した。ヒッチグはニューヨーク・マウントサイナイ大学病院の理事を務めていた。カズンズとヒッチグの熱心な説得で大学病院理事会は原爆乙女を無料で治療することを決定した。その担当は形成外科の権威アーサー・バースキー医師が手術に当たることになった。

1955年2月、カズンズより浜井信三市長に「原爆乙女を20名ほどアメリカに治療に招きたい」との知らせが届いた。市長は「招待を受けるのが礼儀である」と早速準備にかかった。

渡米した25人の原爆乙女の1人は不幸にも手術中に死亡した。帰国後、2人が相次いで亡くなったが、1984年の時点で22人は健在である。そのうち13人は結婚している。

1987年より、谷本清平和賞がもうけられ、後述するノーマン・カズンズ、ジョン・ハーシー、らが受賞している。

私が谷本牧師を知ったのは谷本牧師の長女・^{こんどうこ}近藤紘子著「ヒロシマ、60年の記憶」を拝読したことがきっかけである。(文中・一部敬称略)

参考文献

- (1) 谷本清「ヒロシマの十字架を抱いて」大日本雄弁会講談社、1950年
- (2) 谷本清「広島原爆とアメリカ人」NHKブックス、1976年
- (3) 中条一雄「原爆乙女」朝日新聞社、1984年
- (4) 近藤紘子「ヒロシマ、60年の記憶」リヨン社、2005年